

白秋アートギャラリー（9）

夕ぐれと楽器

椎名 恵理

すずろかにクラリネットの鳴りやまぬ日の夕ぐれとなにけるかな

にほやかにトロンボーンの音はなりぬ君と歩みしあとの思ひ出

最近、吹奏楽部を題材にしたアニメに夢中になっていたせいか、楽器が読み込まれた作品に魅かれています。

どこからか鳴るその音を聞いているうちに、夕ぐれになる豊かな時間が味わえる。トロンボーンも、その語感の柔和さと音色のイメージが「君と歩みしあとの思ひ出」の煌めきを後押ししている。夕ぐれや思い出は、とりわけ管楽器と相性が良さそうである。他にも、夕ぐれと楽器の歌がある。

ほそぼそと出臍でべその小児こども笛を吹く紫蘇の畑の春のゆふぐれ

出臍の小児がほそぼそと吹く笛の音、春の畑と夕ぐれの取り合わせは、素朴であり少し不気味でもある。周囲の静

けさの中に楽器の音が際立ち、歌に溶け込んで読者に届けられる。人間生活を消音にし、楽器の音に耳を澄ます。

病める児はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし畑ばたの黄なる月の出

心地よく鳴るその小さな楽器に夢中になり、あたりは夜になっていた。もろこしが整然と並ぶ畑から、黄の月にクローズアップされる情景は静かで美しい。どんな病だろうか。その子は、かつて病弱であった白秋自身であると言われている。

第二詩集『思ひ出』の「太陽」や「序詩」にも、ハモニカが描かれている。

銀のハモニカに、秋の收穫とりのいれのほひに、

或は青き蟾蜍フグドの肌に触れがたき痛みをちらす。

「序詩」の白秋の幼少期の思い出の中には、病の記憶、夕ぐれ、ハモニカの音色が確かにあるようだ。

音色ねいろならば笛るるの類、／蟾蜍ひきがへるの啼く

医師の薬のなつかしい晩、／薄らあかりに吹いてるハモニカ。

音は記憶と強く結びついている。その音を聞くと、時空を超えて、葉がおう寂しい病床の晩や、ある春の畑の夕ぐれや、君と歩いたあとの思い出の中に、ふいに帰ることができるだろう。